『國民新報』1939年12月3日

[主張]　寒波と吾等　―戦地を偲び慰問品を送らう―[[1]](#footnote-1)

　のはになくかいとつてた、かにのを見た。かゝるのがのにぼすのなるはふをたぬが、にぜられるのはやにられると、のである。にけるはのにまされてるとのことである。

　にる、ましてのでもないものが、、のに、がましいをらすのは、にて、のりとはねばならぬ。がするなるがになきことであるかをしみじみじなければならない。

　さてはこのをふるにり、をなしてならないか。はをなさねばならないか。

　けてはならない。かのめになることのために、一もさずしてかねばならない。とは、々がしてくことにならぬ。そして、は、のをしてはならない。をせぬにいて、であれ、であれ、であれ、てのをしなければならない。かくすることによつて、にはとなり、には、ともなるのである。これこそはのであり、によるである。

　しながらはこのをへ、をするにり、にせねばならぬことがある。それは、やにさをぐための、かのをすことだ。一のをにらう。五百萬で、一一のをにるとしたら五百萬にるであらう。のにしてもで一當り十をすとしても、五十萬はちにまることであらう。んや、百千から、十萬、百萬をしたとて、どをじないのもくないのにいておやである。

　い！ へのをらう。

い！ へのをらう。

は、[在]はがとなつてやつてるのであるが、とをへた、をとした、をしてしい。

1. この文章は単行本『同胞に告ぐ』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)